

子ども・若者の 生きづらさに 寄り添うために

～思春期・若者支援部会の取り組み～





ふるかわ じゅんや
古川 潤哉

佐賀県伊万里市にある浄誓寺僧侶。日本思春期学会 理事、九州龍谷短期大学 非常勤講師などを務める。ホスピス・緩和ケアへの関わりから HIV/AIDS の患者支援、予防などに縁ができて、そこから性の諸問題を含む思春期援助に携わる。教育、保健行政や医療機関などと連携した市民活動としての思春期援助に取り組む。

ともに歩む

思春期・若者支援コーディネーター

養成研修会を開催した背景や想いについて、子ども・若者ご縁づくり推進委員会委員で、本研修会の中心人物である思春期・若者支援部会の古川潤哉さんにお伺いしました。

お念仏をいただく私たち大人が
どう関わるのか

—— 研修の背景と狙いを教えてください。

二〇一四年から始まった「子ども・若者ご縁づくり」は、永年各分野で取り組まれてきた少年教化を宗門全体の運動として昇華させた「キッズサンガ」運動をさらに拡充して展開するものです。「既にご縁にあっている子ども・若者」だけでなく、「これまでご縁のなかった子ども・若者」をも対象としてアプローチをしておりますが、いづれに対しても、「生きづらさ」で苦しむ者が含まれるという視点が大切だと考えています。お念仏をいただく私たち大人が、そのような子ども・若者にどう対応し、関わっていくかは、ご縁づくりにあたっての重要な課題です。

特に、これまで宗門としての取り組みが薄かった思春期に関して、今の若者達がどのような環境にあり、何に生きづらさを感じているのかを学ぶために、二〇一五年から全国五カ所で「イマドキ思春期の悩みとモヤモヤ」と題した公開シンポジウムを実施し、性のことやメンタルヘルスの分野から、思春期の現状について課題を見出しました。ところが、それによって思春期・若者の生きづらさの要因と課題は多岐にわたり、特定の分野だけでは全体像や相関関係を理解することが困難であることもわかり



ました。そして、これらについて学べる機会がほとんどないという実情を踏まえ、宗派として、僧侶・寺族向けにこれらを専門家や当事者から直接学ぶ機会を作るために企画したのがこの「思春期・若者支援コーディネーター養成研修会」です。

—— 思春期・若者支援コーディネーターとはどのような役割なのでしょう？

これは、この研修を修了した方々がこうあつて欲しいという願いに基づくネーミングです。研修では様々な分野の第一線で活躍中の御講師や、既に関わりのある受講生同士などでたくさんの知識や情報、刺激を得ることができません。しかしながら、私たちはこの分野の専門家ではないため、原因のある生きづらさそのものを直接解決する

ことはできません。今回対象としている僧侶や寺族の方は、当事者本人の自覚の有無に関わらず、生きづらさを抱える子ども・若者との接点になる可能性があり、話を聴くことから、それぞれに最適な専門家や相談窓口を紹介するコーディネーター的な存在になつてほしいと考えます。そのために、既に各地で活動している先生や援助のグループとのネットワーク作りを通して、理解者にうまくつなぐことによつて、生きづらさを軽減するきっかけとなつてほしいと願っています。

小さい頃にお寺に来ていた子ども達も中学生・高校生など成長するにつれてお寺との接点が減ることがあります。これは、単に忙しくなつたというだけではなく、これまでの関わりが、道徳的指導やあるべき論を押しつけるように受け止められていて、僧侶や寺族も保護者や学校の先生と同じく評価者と見なされていたために、親離れとともにお寺離れしていつてしまう可能性が十分にあります。子ども達が「まずいことになつた」「失敗しちゃつた」「これは人には言えない」という状況にあるときにも僧侶や寺族には話せるという状況を作るために、私たちは評価者ではなく、あなたの味方ですよという姿勢で普段から接している必要があります。もちろん、甘やかすという話とは違います。そのために、今の子ども・若者がつまづきそうな悩みやトラブルに関しては幅広く知識と情報を

持つていなくてはならないということから、この研修をプログラムしています。

常識やあるべき論の鵜呑み、押しつけによって生きづらさをつくりだしてしまっている

—— 若者の生きづらさとその対応というのはどういふものなのでしょう？

生きるのがつらいという思いは誰しもが持ちえるもので、内容もそれぞれで分類できません。医療や福祉の制度で対応するべきものもありますが、大多数の人と自分が違つているという少数者（マイノリティ）の課題や、性の課題は特に人権に関する課題です。これらは多くの場合、他者との比較や、大多数の意見である常識やあるべき論の鵜呑み、押しつけによつて生じる場合が多いと考えます。特に学校教育においてはどうしても画一性が求められる面があり、本来個性であるはずの自分の特徴で苦しむ人がたくさんいます。また、人に言えない悩みとしていろいろなことを抱え込んでいる人がいます。私たちは、お念仏のご縁にあつた大人として、数の多少を良し悪しの基準とせず、子ども・若者に対してもそれぞれの人格として肯定していけるはずです。生きづらさそのものは消せるものではないかもしれませんが、それを抱えながらも一緒に歩んで

いけるんだということを示すことができれば、それが多くの子ども・若者にとっての救いとなることと考えています。



善し悪しの判断は 一旦保留した上で

事情を聞く

松本俊彦 (Matsumoto Toshihiko)



[プロフィール]

精神科医、国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長。依存症、自死・自傷（リストカット）など、回復支援の第一人者。

「いのちを大切に」、「自分を大切に」という教育があります。これはリストカットをするような子どもたちにとっては、はっきり言って逆効果です。彼らの多くは、たとえば母親から「あんたなんか産まなきゃよかった」などと言われるなかで生きてきています。ですからこのような教育はかえって彼らの孤立を深め、ただでさえ相談できない子どもたちをますます相談に踏み出しにくくしてしまうのです。確かにリストカットは自分を大切にしないことの一つの例ですが、最大の自分を大切にしないことは、人に援助を求めないことであり、安心して人に依存できないことだと私は考えています。

それでは、そのような子ども達に対して、私たちはどのように対処すべきでしょうか。私は学校での講演の中で、「誰でもいいから三人の大人に相談して」と訴えています。なぜ三人なのかというと、少々乱暴ですが全ての大人がまともとは思っていないからです。でも三人い

れば一人くらいは信頼できる大人がいるはずだと言っています。

ですから最後に皆さんにお願いがあります。ぜひ三人に一人の信頼できる大人になって下さい。そのための条件があります。まず、子どもから「切っちゃった」とか「死にたい」などの相談があったときに、この善悪の判断は一旦保留した上で、事情を聞いてあげることが出来る人です。次に、その大人が孤立していないことです。一人で抱え込むとつづれてしまいます。援助を求める力が弱い子どもを支えるには、大人の側が強い援助を求める力が必要です。いろんな仲間や専門家とつながることができればそれが強い力になります。ぜひそんな方になって頂きたいと思います。



二〇一六年十月に本願寺
福岡教堂で開催された

公開シンポジウム

「イマドキ思春期の悩みとモヤモヤ」の講演を要約。

根本の原因は

「関係性の喪失」

岩室紳也 (Iwamuro Shinya)



【プロフィール】

厚木市立病院泌尿器科医、ヘルスプロモーション推進センター、HIV 診療医。学校性教育の第一人者。



よく、「妊娠したかもしれない」という相談メールがきます。このような性のトラブルを減らしていく対策として、日本人はすぐに教育によって何とかしようとしています。このような相談が私のところに届く直接の原因は、知識不足、家庭の問題など様々です。でも同じように知識がなくても、家庭に少々問題があってもトラブルに巻き込まれない人もたくさんいます。その違いは何かと申しますと、それは、いろんな関係性、つながりが有るか無いかです。問題を抱えうになつた時、その人の周囲に話を聞いてくれる友人や家族がいて、きちんと関係性を結べれば、そのつながりのおかげでトラブルを回避できることが多いのです。知識や教育はもちろん大事ではありませんが、「関係性」や「つながり」というところを押さえておくことが何より重要であります。

特に思春期以降に出てくるトラブルとしては、①性(中絶やデートDVなど)、②ハラスメント(自傷、自殺、いじめ、ひきこ

もりなど)、③薬物(タバコ、アルコール)、④ネット(ネットいじめなど)などがあります。一定の世代より上の方たちは、思春期のトラブルといえば「不良」や「暴走族」というイメージがあるかもしれませんが、近年、暴走族に入る若者は減少しています。主な理由は、厳しい上下関係を若い人が敬遠するからだと言われています。今の若者の問題は生身の「関係性」や「つながり」を結ぶのが苦手なのです。実際に中高生の若者たちと接する中、「失敗した」や「助けて」と言えない人が増えていて感じます。挨拶ができない人も増えていきます。自分に自信がなくて嫌われたくない、消極的というように、全体としてひとり一人が弱くなっているように思います。こうした「生きづらさを抱えた若者」は確実に増えています。そして、彼らが上記のようなトラブルの当事者なのです。

今の私の常識が若者とズレているんだなと感じました。普段若者と接する機会があるけれど、彼ら彼女たちは、直接言わないだけで様々に思っていることがあったのだろう、と。本音を聞くことのできる環境をつくりたい。それで安心できる場につながっていければ良いと思います。

受講する前、正直、性に関する講義は受けたくないな、気まずいなと思っていました。でもそれは、私が性を「後ろめたいこと」「人前で話してはいけないこと」という意識を持っているからだと感じました。私がこのまま子どもを育てたら、子どもがゆがんで性を認識してしまうかもしれません。もう少し性と向き合ってみようと思いました。

なぜ僧侶が性教育なのか、講義を受ける前は疑問だった。しかし講義を受けて、袈裟衣を付け僧侶が、世間で当たり前と言われていることとは異なる切り口で語ることによって、子どもたちは違った視点を提供できることがあるのだと理解できました。そして、性と関われるのは真宗だけと言われて、ハッとしました。

受講者の声

【第1期 思春期・若者支援コーディネーター養成研修会】に参加した受講者の感想の一部を紹介します。

自傷行為について、「なぜあんなことをするのだろう」と不思議で、気持ち悪くさえ感じていたが、動機の心理的背景、物理的環境、生理的反応の説明に、深くうなずくことができた。自傷行為に追い込まれてしまう要因もとてもよく理解できた。自傷行為する人の想いやその背景を知るとは、共感できる地盤が整ったことのように感じている。

かわりを持つ上で、言葉のかけ方一つで、かえって相手を傷つけてしまう可能性があることを教えられました。

私はカルトについて無知どころかたくさんさんの誤解をしていたと実感しました。カルトに入るのは変わった人、なぜカルトだとわからないの？と、恥ずかしながらそう思っていました。でもこの講義を受けて、自分が今までカルトに入らなかったのはたまたまで、どこかで接触していたのかも知れないと思知らされました。まわりの人が入っていたら、否定せずに信頼関係を築き続けるというのは、依存やリストカットと通じるものがあります。否定しそだった自分を戒めようと思いました。

第1期 思春期・若者支援コーディネーター養成研修会 概要

第1回 2016(平成28)年5月9日(月)～11日(水)[2泊3日]

第2回 2016(平成28)年7月6日(水)・7日(木)[1泊2日]

第3回 2017(平成29)年2月8日(水)・9日(木)[1泊2日]

聞法会館、浄土真宗本願寺派宗務所

講義内容 (一部抜粋)

- ▼岩室紳也(泌尿器科医)「思春期と性」…性教育とその方向性を通し、性にまつわる思春期の悩みを知る
- ▼松本俊彦(精神科医)「自死・自傷・依存、生きづらさの実態」…思春期の生きづらさに気づき、関わるための基礎となる事項と対応の実際を学ぶ
- ▼紅音ほたる(タレント元AV女優)「女優から見たアダルトビデオの実際」※2016年8月逝去…AV女優という仕事や業界の実態について学ぶ
- ▼古川潤哉(浄土真宗本願寺派僧侶)「生と性と死からいのちを考える」…思春期の興味を配慮したいのちや性の伝え方を考える

アンケート分析

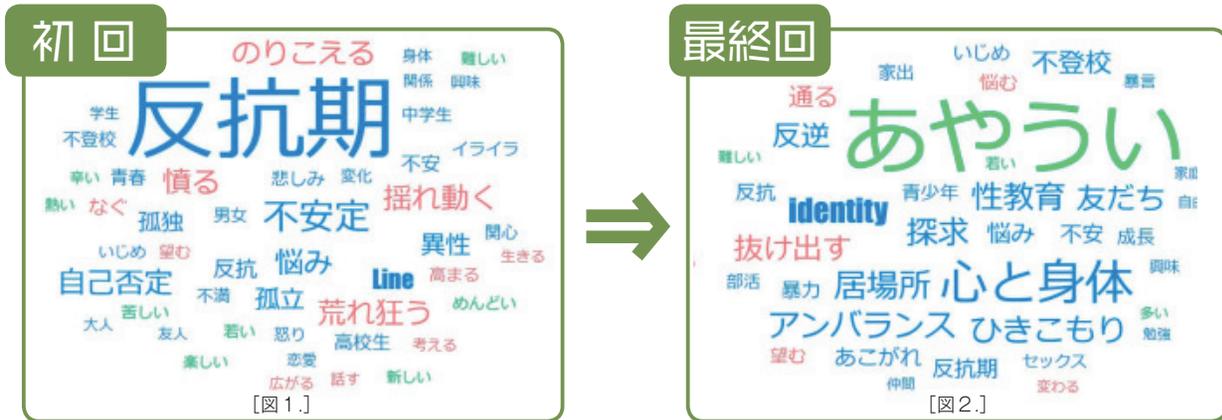
研修受講者には毎回アンケートを実施した。研修会を通して、受講者にはどういった変化が生まれたのか、どのような気づきがあったのかを共有するために、アンケート分析結果の一部を紹介する。

※雲居玄道氏による「第1期思春期・若者支援コーディネーター養成研修会 アンケート分析報告書」から抜粋。

① 思春期でイメージする単語は？

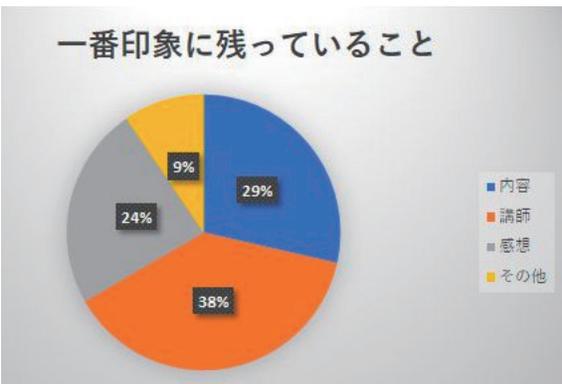
初回および最終回に、思春期に関する単語をそれぞれ答えてもらっている。研修を通じてどういった変化が生まれているのかを考察する。

単語の色は品詞の種類を表しており、青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞を示す。以下の[図1.]より研修会に参加した時点において、「思春期」に関するイメージは年代や不安定さや恋愛といった要素が多く見られる。対して[図2.]より研修を受けたあとには、不安定さに加えて、性や暴力などにも広がるとともに、恋愛についても異性のみから同性も含むような形へとイメージが広がっていることが見て取れる。



② 一番印象に残っていることは？

最終回でのアンケートにおいて、全日程を通して一番印象に残っていることについて自由記述のアンケートをとっている。意味に基づくクラスタリングを行い4つのクラスタに分けた。それぞれのクラスタの内容について、精査しクラスタの内容についてラベルを付与した。各クラスタに所属する割合を[図3.]に示す。また詳細のアンケートの記述を[表1.]にその結果を示す。



[図3.] 各クラスタの割合（一番印象に残っていること）

[表1.] 一番印象に残っていること

クラスタの内容	クラスタに所属するアンケート
プログラムの内容	<ul style="list-style-type: none"> 一般的な若者支援の類をみないプログラム 一見バラバラに見える各講義のテーマが根底ではリンクしていた 横のつながり、情報の大切さ 今まで知らないことをいかに知らなかったか打ちのめされました 生と性と死の関係に関わった ディスカッションで探っている情報が異なっていること
講師の名前など	<ul style="list-style-type: none"> 古川さん 岩室さん コンドームの達人 古川さんはじめこの企画を作っていた、またこの企画に参加して来られた皆さん 武田さんが講義で仰った「近所のお節介なおじさん」 あみちえさんの「初体験トーク」と「サバイバルスキル」 中野さんの「私はどう見えますか？」 性に関する専門的分野
受講しての感想	<ul style="list-style-type: none"> 専門知識をもっている講師の先生方からのお話を自身の知識として支援するのは怖いなど改めて感じました 正解はないけど間違いが多い分野、日々のあり方が問われると思われるのが、生のことだと感じました 現場の生々しさ、自分が思っているイメージと現場のズレを感じました 相手が持っているものさしを、理解し、まず話をきくことの大切さ 「自己肯定ができない」誰でも自分が一番可愛いと思っていると考えていましたが、ショックでした
その他	<ul style="list-style-type: none"> この研修に参加されている皆さん、ただの興味本位でないやる気 ここだけでやるには勿体ない気がします

Tips

「クラスタリング」とは、データなどの集合体を、機能やカテゴリごとに分けて集めること。また、クラスタリングはクラスター分析、クラスター解析と呼ばれることもある。

子ども・若者 ご縁づくりにおける 思春期・若者支援について

私たちは、皆それぞれ違った性格や性質を持っているものですが、思春期・若者は、人との違いを「生きづらさ」と感じる場合があります。

昨今、若者の「生きづらさ」は、「居場所の無さ」や「周りとの関係性」、「自己肯定感の低さ」などが指摘されています。

しかしながら、「生きづらさ」はそうした分類だけによって容易に捉えられるものではありません。それらは人や状況に応じて様々あり、多くは周囲の無理解によって生じます。そのうえで、私たちにとって大切なことは、「生きづらさ」を定義するよりも、それぞれの「生きづらさ」をそのままに認めていくことではないでしょうか。

浄土真宗本願寺派では 2014 年度より思春期・若者支援部会を設置し、「生きづらさを抱えている若者」の今を常に学びながら悩みに寄り添い、多様性を認め合う関係づくりの一助となることをめざしています。

本部会のおこなっている取り組みは、「一般的な常識の押しつけ」や「こうあるべき」という指導ではありません。上記のような視点を大切にしながら若者支援を、社会に向けて発信していくと同時に宗派内の人々の子ども・若者に対する意識や働きかけに変化を及ぼしていくことを目的としています。